

云々…」しかし、これを書かれた先生は、私が着任してからの14年間の半分以上主任をつとめられた。回り合わせとはいえ、浅井、式向先生はとも角、あとから来た私まで教室外の仕事を引き受けさせられ、結果的に先生の負担を重くしたことを申し訳なく思っている。

仕事に関しては謹厳な先生も、仕事外ではユーモアに富み、庶民的な面をお持ちである。私がこ

れまでにたった一回だけ経験したカラオケバーは先生のお誘いによるものであったし、話の途中によく軽いジョークをはさまれた。某週刊誌上で先生の2人のご息のお嫁さんが証言しているように、イタズラ精神も旺盛である。前号の1年生巡検報告で、先生の健脚は今も衰えていないことが明らかであり、これからも若々しい思考と共にますますお元気で活躍して頂きたいと思っている。

## イギリスの地理教育

内 藤 博 夫

地理教育の問題は1988年度に続いて1989年度も談話会のテーマとなった。大学で仕事をしていると、自分が行っている講義や演習の改善については考えることがあっても、中学・高校における地理教育についてはうとくになりがちである（良くないことと反省している）。たまたま談話会でこの問題についての討議に参加できたことは、私にとっても有益であった。その際思い起したことは、ロンドン大学に滞在していたときに訪問したイートン校とその地理教育だった。イートン校といえば、イギリスのパブリック・スクール（私立学校）の中でも名門の誉れ高い学校である。パブリック・スクールについては池田潔氏の名著『自由と規律』（岩波新書）にくわしい。その中では「ウォータールーの戦勝はイートン校の校庭において獲得された」というウェリントン将軍の言葉が引用されている。イートン校に代表されるパブリック・スクールのすぐれた教育内容を強調した文章である。1961年6月、東大の山口岳志先生から手紙をいただいた。イートン校にC.J.O.クックという地理の先生がいるから訪ねてみてはどうかというものだった。良い機会だと思ったので山口先生のお勧めに従い、当時同じロンドン大学に滞在していた中央大学の青野寿彦氏にも声をかけ、1961年6月27日、2人でクック先生をお訪ねした。イートン校はロンドン西郊の町、ウインザーにある。鉄道の駅を降り、丘の上に立つウインザー城を背にしてテムズ川にかかる橋を渡るとほど近い所にイートン校がある。1440年創立という歴史

にふさわしく、構内の建物の多くは伝統を感じさせる威厳にみちたものだった。現在生徒は1200名以上、専任教員は125名ということだった。就学年齢は13～18歳、つまり日本でいえば中学・高校を一つにしたような制度になっている。全寮制で、女子は入学を禁じられてはいないが結果的に男子のみになっているとの説明だった。クック先生は寮の一つのハウス・マスターを兼ねており、その寮の中に住宅が与えられていた。構内を案内していただくとともに、日英の地理教育について意見をかわすことができた。

クック先生の地理教育に対する考え方は、慶応大学留学の成果の一部をまとめた論文「地理教育の役割——日本とイギリスの比較分析——」（地理、27巻2号、1982年）の中に示されている。この論文で注目される点は、イギリスでは生徒に事実を詰め込むのではなく、それを理解させることにつとめているということである。そのためにはゲームやシミュレーションという方法もしばしばとり入れられているという。こうした指摘には、日本の地理教育は知識偏重になっているのではないかという批判が含まれている。イートン校では地理の教材や生徒のレポートを見せてもらったが（残念ながらその日は地理の授業はなかったため、参観することはできなかった）、レポートは単に文献を読んでそれを整理したものではなく、生徒が自分で行なった調査記録が多かった。日本では文部省が定める学習指導要領があり、教師はそれに沿って教育しなければならないという制約

があるが、イギリスにはそのようなものはない。そのため教師には創造的な教育を行う余地が広く与えられているといえる。地理教育に限らず、日本の教育全体が知識偏重になる背景には、学習指導要領の存在もさることながら、入学試験対策がある。受験戦争とか、受験地獄という言葉が当然のこととして語られているのが日本社会の実情である。イギリスにも受験競争はあるが、日本のように全国民をまき込んでの過熱ぶりはない。受験戦争を沈静化させ、ゆとりをもって創造的教育を行うことができないものか。教育関係者と政治家

に課せられた大きな問題だと思う。いま一つ、イギリスの地理教育から学ぶべきことは、大学と中学・高校との関係が密接である点である。イギリスの教師は必要な教材を、大学も協力している資料センターから容易に入手できるという。大学教師の初等中等教育に対する関心も高いようである。高等教育と初等中等教育が有機的に結びついてこそ、教育の効果は大きくなる。このことを再認識させてくれたのがクック先生との出会いと談話会での議論であった。

## 博物館にて

田 宮 兵 衛

1989年12月、ある幸運に恵まれてカイロに出張する機会を得た。目的は、「気候変動と水管理に関する国際セミナー」に出席することである。このセミナーは、エジプト政府の水研究センター等が主催したものである。気候問題に世界の関心が集まっていることの反映の一つとして、筆者も参加できたのであろう。ということで、降水量の変動の理解の現状について、多少大げさな題目のレビューペーパーを読むことができた。

以上が近況、以下は随筆である。すなわち、この機会に見ることができた3つの博物館を通じて得た感想である。なお、いずれの博物館でも本来費やすべき時間の十数分の一しか費やしていないことを断わっておかなければならない。

1つはカイロにあるエジプト博物館、残り2つは飛行機の乗継ぎを行ったフランクフルトにある歴史博物館とゼンケンベルク自然博物館である。エジプト博物館も歴史博物館の範疇にはいろいろが、フランクフルトの歴史博物館とは内容は全く異なる。どの様に異なるかは後で述べる。自然博物館も、地球上の生命の発達の流れを示す形の展示をしており、歴史博物館と共通する点がある。

エジプト博物館にはいると、いきなり正面にラムセスⅡ世か誰かの大きな石像があったりして圧倒される。2階には以前日本でも出張展示されたツタンカーメン関連の展示品が処せましとばかり

に並べられ、引続き圧倒される。他にも、美術の教科書等で馴染みのある書記の像とか村長の像とか、またそれに似たようなものが沢山ある。あるいは、無数のミイラの棺が棚にはこりをかぶって並べられていたりする。

歴史的に最後の方は、グレコローマン時代の展示室となる。個々の展示品は大したものであるのかも知れないが、エジプト五千年の歴史に比べると、全体としてはスカ（注）のようなものである、としか言いようがない。

そのスカの一部を拡大しているに過ぎないとも言えるのがフランクフルトの歴史博物館である。第一次世界大戦の銃後風景をスライドで連続的に示す展示や、ドイツの産業革命の進行にともなう各種機械類の変遷等々、展示の内容はかなり豊富である。しかし、エジプト博物館での圧倒されるような感じは受けない。

ゼンケンベルク自然博物館は、動物を主とした膨大な標本が並べられている。ここは、処せましという感じは少なく、系統的な展示である。生物の発達史に従って最後に人類に達する。そこには、ミイラを入れた棺桶が一つ置いてあった。この博物館で、再び圧倒される感じを得た。そして、生命の発達という圧倒的な時間の流れの中においては、人類の歴史もスカのようなものである。

最後に、各博物館で体験した日本と関わること